

## 「荒川水循環センター見学会」活動報告 20180516

「優れた下水道技術を学ぶ見学会」のシリーズ第4回として、平成30年5月16日（水）に埼玉県戸田市にある荒川左岸南部流域下水道の「荒川水循環センター」を会員18名で見学した。

この流域下水道は昭和41年度に大阪府の寝屋川流域下水道に次いで全国で2番目に事業に着手し、昭和47年10月に供用開始となった。現在は1日当たり約100万トンの処理能力を有し、さいたま市を中心に日々200万人近い県民の生活を支えている。

当センターは、事業に着手してから既に50年が経過しており、今回は大規模流域下水道の運転管理や処理技術の歴史の変遷をたどる見学会として企画した。

最初に埼玉県OBで21世紀水楽部会員の山木幸夫様から「埼玉県流域下水道50年の歩み」と題して講話をいただき、続いて埼玉県下水道公社荒川左岸南部支社副社長の齊藤秀幸様から当センターの概要について説明を受けた後処理場内を案内してもらった。

山木様からは、流域下水道計画が策定された時代的背景として、埼玉県の人口伸び率が昭和35年から昭和55年までの20年間で2倍（全国平均1.2倍）になったことで

当初の計画が大きくなったことや県内に2箇所ある第二種流域下水道との計画規模の違いによるスケールメリットについての説明があった。そして当流域下水道が荒川の河川敷に処理場用地を確保した歴史的経緯を100年前～現在の地形図を対比させた今昔マップをもとに説明され、事業着手から短期間で供用開始できた理由として、新大宮バイパスの建設にあわせて敷設した鴨川幹線のボックス工事や押込シールドについての話があり、供用開始後の運転管理では最初に導入した脱水機や焼却炉の写真等を紹介しながら技術的に試行錯誤の状況であった様子を話された。

齊藤様からは、当センターの施設概要についての説明を受ける中で、供用開始から今日までの水処理や汚泥処理設備の稼働年表が示され、高度処理の導入や下水処理技術の歴史の変遷について理解を深めることができた。

処理場内の見学では、沈砂池や水処理施設で全く臭気を感じられず環境対策が十分行き届いた状況に参加者も大いに感心した。また管廊内では県内の高校生が描いた壁画があり、地下空間での別世界を味わうことができた。反応タンク内の処理状況や最終沈澱池の処理水を確認した後、最後



荒川水循環センター



沈砂池を見学する参加者



高校生による地下管廊の壁画

に覆盖上部の公園に上り処理場内を一望した。参加者の中には数十年ぶりに当センターを訪れた人もいて、昔の記憶と重ねあわせながら感慨深い様子であった。

見学後の質疑応答では、合流区域の割合や雨天時における運転管理、高度処理への対応、さいたま新都心地区の再生水事業等について活発な質問や意見があった。

終了後は武蔵浦和駅近くの居酒屋で講師の山木様にも出席していただき交流会を開催し見学会を締めくくった。

最後に、埼玉県下水道公社荒川左岸南部支社の皆様には、ご多忙のところ今回の見学会を快くお引き受けいただき誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

